

輝いてます

第23回NHK全国俳句大会 特選

ひと

なん ぽ なお こ
南保 順子 さん

日常のひとこまを俳句に



「蕨にも俳句の題材があふれてます」と南保さん

五

七五のわずか17文字の短い言葉で季節の情景や心に残った感情を表現する俳句。蕨でも今夏、約20年ぶりに俳句連盟の句集が発刊されるなど盛り上がりを見せています。そんな俳句に親しんでいる南保順子さん(82歳・南町2丁目)が、今年3月に開かれた第23回NHK全国俳句大会で、3万6730句の中からみごと特選に輝きました。

今回受賞した句は「うすらひと言えば微かに動きたる」。ある朝、水が入ったバケツに張った薄氷が、日の光を受けて少し動いたことから、春の訪れを感じて詠んだ句です。人と自然との応答を鋭くリズムカルに表現していると高く

評価されました。日々のささいな出来事でも俳句にする日頃の習慣が実を結んだのです。ふだんは交流プラザさくらで「百代」俳句会の仲間と楽しく活動している南保さんが初めて俳句に触れたのは平成9年。「百代」創立のきっかけになった南公民館主催の初心者俳句講座でした。当時は他の習い事もあり、所属しませんでした。歳時記を引いて季語を覚えたり、新聞の投句を研究したりと勉強は続け、平成22年に入会。猪俣千代子先生の下、本格的に学び始めました。その後、先生が亡くなり、指導者不在の時期が続きましたが、代表の「みんなが先生、みんなが生徒」の言葉を胸に、句会や吟行を通して研鑽を積んできました。会の仲間から「言葉の引き出しが豊富」と評される南保さんが詠む句は、2年前に角川全国俳句大賞で特選に選ばれるなど、数々の賞を受賞しています。「いっしょに取り組んできた皆さんのおかげです」と笑顔で話す南保さん。これからも、身近な自然や出来事などに思いをはせ、なにげない日常を、俳句を通して鮮やかに彩っていくことでしょう。

今月の河鍋晩斎記念美術館

天才絵師の作品
蕨にあり

—No.73—

Kyosai
Kawanabe

現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の晩翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 晩斎

天保2年(1831)
～明治22年(1889)

本図は晩斎と同時代の人気絵師6名の合筆による双幅掛軸の右幅です。右幅には「節婦(貞節を守った女性)」、左幅には「奇女(類いまれな行いのあつた女性)」が各3人描かれており、晩斎は右幅いちばん手前に、源義経の側室・静御前を描いています。中央には小林永濯(1843～1890)が大磯の虎女、上部には渡辺省亭(1852～1918)が義経の母・常盤御前を描いています。また、右上には幕末の三舟の一人、勝海舟(1823～1899)が賛を寄せており、優美で壮麗な作品に仕上がっています。

河鍋晩斎記念美術館 開催中

企画展「古今東西晩斎人物図鑑」展
同時開催 特別展「『晩斎漫画』の世界」展



晩斎ほか合筆
「節婦奇女」右幅部分



詳しい内容は
美術館のホーム
ページをご
参照ください

開館=午前10時～午後4時
休館=火・木曜日、毎月26日～末日
ところ=南町4-36-4
入館料=一般600円 高校生・大学生500円
小・中学生300円 65歳以上500円
※65歳以上は年齢の分かる物、学生は学生証のご提示を
詳細=同館(☎441・9780)

